

研究復帰と子育てがこの場所から始まった。

保育園に8ヶ月の娘を初めて預け、初めて研究所に行った日はPhDの学生のFelicity嬢の誕生日。彼女は若くて元気でおしゃべりで魅力的な女性だった。ランチをみんなで食べに行くことになり、女の子たちがにぎやかにボーイフレンドのうわさ話を花を咲かせるのを聞きながら、「日本に帰るころには、Felicity達のおしゃべりに加わってぺらぺらとおしゃべれるようになってにちがいない」という甘い期待を抱いていた。そして2年後、にぎやかなポストクの女の子達との早口で気の利いた会話という目標はやはり実現できなかった。その理由について反省を込めて検証してみたい。

まず、英語上達のために留学するのであれば、日本人のいない仕事の暇なラボに行くべきである。私が一人ぼっこのさびしい緊張した日々を送ったのは、Felicityの誕生日からわずか3週間であった。同じラボには日本から研究者が次々に入ってきたし、落ち着いて周りを見渡すと、研究所内には日本人が7人もいた。ペーカーは外国からのポストクが大勢集まってくるのだが、15人中7人が日本人というのはかなりな割合である。日本人の研究者は優秀で、どうしても有名な研究室に集まってしまうので、アメリカのノーベル賞受賞ラボでもきつと似たようなものであろう。Felicityは同じラボでもプロジェクトが異なり実験する部屋が違って、私と一緒にいたのは、無口なおージーのリサーチアシスタントの青年、自信家のロシア人と彼に気のある意地悪なリサーチアシスタント。この環境下で黙々と実験をしていたので、結局英語をしゃべったのは朝夕娘を預ける保育園のみということも多かったのである。

また、英語上達のために留学するのであれば、家族連れでなく単身で乗り込むべきである。家へ帰ると夫とはどうしても日本語で話すことになる。娘が小さいと、ラボの後で大学の英語コースに入って勉強をすることもできない。私とは対照的に日本人がまったくいないメルボルン大学のラボに入った夫は、悔しいけれども私よりはずっと上手にしゃべれるようになった。

しかし保育園のおかげで他の日本人が知らない英語をたくさん覚えることはできた。かなり上手になった人でも聞き取るのが難しい幼児英語もちゃんと聞き取れたし、あまり役には立たないのだが、マザーグースや童謡は100曲近く覚えた。娘が英語を少しずつしゃべれるようになると、発音も2歳の娘に直されるので私達の英語力も若干上達した。もう少し長く滞在していたら、格段に上達しただろうと非常に残念である。

そして一番の原因は私のshyで怠惰な性格にあったのだと思う。いざしゃべろうとするとどう表現してよいかわからないし自信がない。オーストラリアは多民族国家で、英語をしゃべることのできない人が世界各国から移民として暮らしているので、実は英語がわからない人がいるということがめずらしくない国なのである。こちらはヒアリングが比較的良くわかるようになると、同じテンポでしゃべることができないのがもどかしく、つい単語を並べていると、むこうは頭を働かせて推察してくれる。それでのおおよその意思疎通ができてしまっていた。

ところが隣のラボにいた日本人の友人はそうではなかった。彼はどんなに時間がかかっても、じっくり英語の構文を組み立て、たとえば三人称のsのつけ忘れなど何度も言い直し、正しい文法でゆっくりと話をしていた。おージー達はそれをいらいらして聞くのではなく、口をそろえて「彼は非常に誠実ですばらしい人である」と言うのである。もちろん彼のキャラクターもあるのだろうが、それから気がついたことは、移民でないおージーが、みんなきちんとした英語を使っているわけではないということである。3人

称のsや過去形、現在完了形、時制の一致など大学まで英語教育を受けてきた私たちにはまず間違えることのない文法を、きちんと使えない人もかなりいるのである。

帰国後おージーたちとメールでやり取りをするようになって、「とてもよい英語だ。YOKOはメルボルンに来たときにはぜんぜん英語ができなかったのに、こんなに上達するなんてびっくりした」と書かれてこちらもびっくりした。そんなにひどかったかとショックも受けたが、できなかったのではなく、使っていなかっただけなのである。その場にいれば自然とおしゃべれるようになるのではなく、使う努力をしていなければ、きちんとした英語をしゃべれるようにはならないのである。

今年の1年生のTOEICの点数はリスニングのほうが良かったそうだし、最近では英語教育も文法よりヒアリングやスピーキングに重点を置くようになってきている。しかし、会話は所詮コミュニケーションである。英語で育ち、英語しかしゃべらなかつた娘は日本に帰るとあつという間に英語を忘れてしまった。所詮そんなものである。

オーストラリアでも、大学で高等教育を受けている人はきちんとした英文を書くことができるし、エッセイなど記述力を徹底して教育されている。それが高等教育であり教養であると思う。日本人は長い文章を書けるかどうかは別にしても、文法的にかなりきちんとした英語を書ける、そしてしゃべることができるということが、外国人にはとても高く評価されている。これはすごいことだと思う。それなのに、何年も英語を勉強してきたのにちっともしゃべれず役に立たない英語教育なんて、という理由でヒアリングやスピーキングに重点を置くようになってしまったのは、非常に残念なことだと思う。

だから皆さんには、きちんとした文法の基礎の上にしつかりとした文章を記述できるような英語力をつけてほしいと思う。それさえしつかりしていれば、聴く、しゃべるなどということはどのようにでもなるからだ。

英語をしゃべる環境に漫然と身をおくだけでは、その中で暮らしていくのに困らないだけの会話しか身につけることはできないし、そのような英語は2歳の子供でもすぐにできることである。国際人として恥ずかしくない教養と品格のある語学力をぜひ大学で身につけてほしい。

ちなみにFelicityはおしゃべりのせいばかりではないが、博士課程を修了することができず、私の帰国前にラボを去ってしまった。私のささやかな目標が達成できなかったもうひとつの理由である。

## 外国語と私

太田 裕治

### <その一： 第二外国語>

大学の教養課程では第二外国語にフランス語を選択した。理由はいまでもよく覚えていない。

入学後のクラス分けでは学年全体で全15組くらいであったと思うが、そのほとんどがドイツ語を選択するという状況であり、フランス語は帰国子女クラスを入れても2、3クラス程度ではなかったかと覚えている。

勉強したことは殆ど忘れてしまったし、本も残っているのはオレンジ色の辞書くらいである。覚えているのは、動詞の活用が面倒なこと、LL教室ではrの発音が鴨みたいになりガーガーすること、マノン・レスコーという18世紀の大恋愛小説を読んだこと位であろうか。

それでも、英語だけでなく他の言語にも触れたことで物事の見方幅が広がることは良かったと思う。第二外国語を必修としない大学も増えつつあり、何に役立つの？などと言わずに頑張って勉強して頂きたいと思う。

とはいえ2年間勉強して、新婚旅行でフランス語圏のブリュッセル、パリをそぞろ歩いてはみたものの、人々が何を話しているのか全く分からなかった、その程度のものです。

オルセーに行ったら、2人組の老姉妹がなにやら私達のほうに近づいてくるので、一瞬硬直しましたが、なぜだかやさしく英語で話し掛けてくれました。それ以来フランスには行っていません。(オルセーは休館日でした。)

<その二: Harry Potter と phonics>

この原稿を書いている週末には3作目、ハリー・ポッターとアズカバンの囚人が公開となる。混雑が嫌いなので当分行かないと思うが、映画館で見るのが楽しみである。最初は子供の映画、と相手にしていなかったが、家族で1、2作を映画館で見て、正直はまってしまった。子供達の成長振りがなんともかわいらしく、また、たのもしく感じられる。

インターネット上でスクリプトを公開しているサイトを見つけ、両方のスクリプトをダウンロードし、しばらく通勤時間を利用して、何度も聞いていた。スクリプトに関しては、学生の頃 Back to the future にもはまったことがあり、M J Focks のハスキーな声を楽しみつつ英語の勉強にもしていた。

Harry Potter はイギリス英語なので発音や言い回しなどが米語と違い面白い(品がある?)と感じる。海外の学会に行くと色々な国の人が色々な発音で英語を話しており、Japanese English もそのひとつ。日本で耳にする英語は殆どがアメリカ中西部の英語であるように思える。スペクトラムの広さを理解するのも有効ではなからうか。

音に関して一番感心したのは4歳になる子供。その年齢なのでアルファベットという概念がなく、音で捕らえるしかない彼女は、家族の誰よりも発音が上手になった。特にロンのまねが上手で、ハーマイオニー気取りの長女とよく英語で遊んでいる。幼稚園の帰りに外国人に英語を習っているが、その教授法は技術的には phonics というらしく、その発音を聞いていると必ずしも外国に住まなくてもよいのだと確信させられる。オーストラリア出身の先生なので、ややもすると a の音が"アイ"に変わりがちなのが気になるが。

<その三: 飲み物・食べ物>

外国を旅行して一番困るのが食べ物。まさかいつもマクドナルドというわけにも行かない(なぜ世界中どこに行ってもあるのか?)。たまには美味しいものを、とレストランに入るのであるが、メニューが分からない、分量も分からない。よく知っている人についていくのが一番安心であるが。

その1・ビール。シカゴで飲んだ黒ビールは本当に美味しかった。ミシガン湖のほとりに立つと、VI Warshawski のセンチメンタル・シカゴ(サラ・パレツキー)の気分。ビールは味的にはギネス(アイルランド)が割と近いように感じるが、もう一段上のようにも思える。注文の時は dark beer で、ビールについてはいうまでもなく英国も美味しい。カウンターに行くと様々なサーバがあって選ぶのに困るが、日本の味に一番近いのは Lager というタイプ。グラスの大きさについては SI 単位系をまるで無視した pint がいかにも面白い。これと fish & chips の組み合わせは定番(美味しいとは言いません)。

その2・ボローニャ。最も古い大学(ボローニャ大学)のあるイタリアの中世都市。一方でファッションとグルメの街でもある。いろいろ食べ歩こうと考えては見たものの、英語のメニューにもチンプンカンプンなのであるから、イタリア語ならまして、オーストリアの先生から行く前に、Fungi と言えば分かるといわれ、恐る恐る注文。Fungi は菌

類のことであるが、きのこ料理を指す。ポルチーニ茸(Fungi Porcini)が有名であるが決して安くはないのでご注意ください(味は確かに良い)。

その3・オーストラリアのカプチーノ。Flat White と言い、地元の人には殆ど"フラホ"に近く発音するため最初は全く聞き取れなかった。コーヒーの上の泡の造り方に2種類あって、Flat White は蒸気を注入して作る方法(スチームタイプ)を採用しているのでも時間がたってもさめずに美味しく味わえることが特徴。この他にも色々ありますが、おなががすいてきたので、このあたりで失礼します。

編集長から頂いた高尚な題目が最後には諸国漫遊食べ放題になってしまったが、ご覧いただければ幸いです。ご意見・感想は筆者まで。

## 人との出会いをひらく言葉

伊藤 亜矢子

学生の頃、アルバイトで、ある心理学会の国際大会のお手伝いをしました。

1日目の受付業務。外国からの参加者が、掲示板の見慣れない日本語に、不安そうな顔で首をひねっています。「何が書いてあるの?」と唐突に英語で聞かれ、まずはにっこり。笑顔で応え(笑)、そして、当たらずとも遠からずの回答(しかできません)。そんな怪しい通訳なのに、ものすごくほっとした笑顔で感謝されました。

確かにハングルやイスラム文字など、見当もつかない掲示だらけだったら、不安になりますよね。そんなときには、片言の英語でも、ずいぶん役立つものだなと思いました。

そして次の日、今度はワークショップの会場係。じゃんけんで当たったのは、すでに亡くなられた歴史に残る臨床家の奥様のセッションです。一夜漬けて和英辞典をひき、「ご用がありましたら、なんなりとお申し付け下さい」と決まり文句の英語表現を暗記。コチコチになって挨拶すると、思いがけずニコリ笑顔で抱きしめられました。

そこまではよかったものの、続くセッションでは外国人と日本人の参加者が入り交じってのワークもありました。なかには、年輩の看護師さんなど、学生の私より英語に無縁な参加者もいます。そうなると思っても分かる者が、にわか通訳です。文字通り冷や汗ものでしたが、それでも、自分の過去を遡るセッションで、オーストラリア人の心理療法家を母に見立て、幼い頃を遡るロールプレイをした年輩の日本人女性が(たどたどしすぎる私の通訳にも関わらず)、心理療法家の深い共感に、涙をはらはらと流しています。言葉や国境を超えたダイナミックな心理療法的アプローチの展開に驚くと同時に、わずかのキー・ワードでも、これだけ心をつなぐことができるのかと驚きました。言葉を超えたものが2人を動かし、しかしそこに言葉がなければ、その出会いもないのです。

学会中、「どこで英語を覚えたのか」と外国人参加者に聞かれ「公立の中学と高校」と答えると、「日本の英語教育はそんなに優れているのか」と驚かれました。「?」と、思わず言葉につまりましたが、確かに当時の私は、ごく普通の中学校と高校の授業で英語を学習しただけでした(ですから、みなさんもせつば詰まれば必ず英語が話せます!?日本の英語教育はすばらしい!?)。

とはいえ、当時の、おそらく今以上に読み書き中心だった英語教育では、まともに話せるわけはありません。それに比べて、街で出会う韓国や東南アジアからの観光客や留学生は、なんと英語をよく話すことか。やはり日本人は英語がとてつもなく苦手なのだ・・・そんな思いがずっとありました。

しかしそうした思いも、「誰だって、学習すればするだ